

Title	<大會抄録>居延漢簡の集成：文書を中心に
Author(s)	大庭, 脩
Citation	東洋史研究 (1979), 38(3): 486-486
Issue Date	1979-12-31
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/153737">http://dx.doi.org/10.14989/153737</a>
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

に並べて、その現代史的發展に着目しながら、それぞれの段階の各國に現われた特色ある現代イスラムの展開とその歴史的發展について、相互に對應するかたちで概観を試みたい。

近代史直前の復古主義的改革（ワッハービーヤ）、一九世紀末の專制批判と反英の民族運動（アフガニー）、二〇世紀初頭の近代主義改革（アブドゥ）、第一次世界大戰後のロマンティックな民族意識、第二次世界大戰直後のイスラム主義（ムスリム兄弟團）、などの現代イスラムの諸問題を取擧げて、三國間の發展を比較検討したい。

トルコ、エジプトに比較して社會經濟的發展の遅れたイランでは（C. Issawi）、カージール朝末からイラン革命にいたるまで、國民が宗教指導者を政治的代表としてたてるパターンがみられる。

## 西周金文の史料性格

松 丸 道 雄

西周史研究にとって、もっとも重要な同時史料が青銅器銘文（金文）であることは、言うまでもない。これを對象とした研究は、宋代以來つみ重ねられて、大きな研究領域を形成してきた。

しかし、今、改めて考えてみると、この金文を古文書史料と見做した場合の史料性格についての究明が、殆どなおざりにされてきたのではないかと考えられる。古文書である以上、まず第一に、それが誰によって誰に對して書かれた文章であるのかを明確にしなくてはならない筈であるにも拘らず、實は充分考察されないまま、屢

昧に過ぎられてきたのである。その上で更に、このような考察は、古文書の記載されている青銅器の製作事情そのものとの關連の上でなされるべきであつて、その點もまた、殆ど無視されたままであつてよい。

金文の作文者および器の製作者それぞれが、王—諸侯—臣を主軸とした社會構成のなかで、どのように結びつき、箇々の史料として現存しているのかを見極めることが、史料性格を確認する最重要事であろう。この點についての見通しについて論じたい。

## 居延漢簡の集成——文書を中心に

大 庭 脩

一九七三・四年に甲渠候官、甲渠第四隊、肩水金關の三遺跡の發掘が行なわれて、二萬點近い新居延漢簡が出土したので、漢代の木簡研究の主流である居延漢簡の研究は新生面を開こうとしている。

舊居延漢簡の研究は、いろいろな基準によるグループ化によって、孤簡、斷簡の性格づけと、資料の原型である冊書への復原の作業がなされ、居延漢簡の集成<sup>①</sup>という命題のもとに、森鹿三・永田英正兩教授が、また同様の目的のもとにマイクル・ローウェー博士が業績をあげられた。

現在残されている部分は、文書の分類作業である。この作業は、文書簡の書き出しと書き止めの文言、ことに書き止めの文言によって分類ができると思ふので、その二・三の作業例をあげ、特に檄書という文書を探つてみたい。